

蛇紋岩にふとん掛けて（二）

タイミングが悪いことに、嫁さんが帰ってきた。

「何これ」「買ったの」「いくらで」「何で」「どうして」「意味あるの」「返してきなさい」と矢継ぎ早に容赦ない。返答する余地は1ミリもない。経緯や背景を正確に把握することなく、一方的な憶測や自分に都合が良い付度で思考が前のめりになっている。

「あったんだ」「帰ってきたら、ここにあったんだ」「ねえ。よもたん」と弱々しく返答するも、納得や理解の対極に位置している様である。睨みが相当に効いている。

第一発見者であり、その物体に嫁さん以上に反応していたよもたんは、こともあろうにソッポ向いている。どうしたよもたん。もういいのか。やはり睨みが効いているようだ。

「それで、いくらだったの」誘導尋問だ。

「払っていない。ただ。ゼロ円」「支払ってないし振込んでない」「あったの。ここに」「何で」

「知らない」「分らない」「お前が買ったんだろ」少し逆ギレしてみる。

「ふーん」「あたしが買ったって言うの」言わなきゃよかった。

「ごめん」「そうは思わなかったんだが」「つい」守勢に回らざるを得ない。

「つい?」「当たり前でしょ」「何で買わなきゃいけないのよ」寄り切られそうだ。

「でも、俺が買ったわけでもないし、どこからか持って来たんでもないんだよ」

「あら、じゃあ、よもたんが啜えて持ってきたとでも言うの」「ねえよもたん」

よもたん卑怯にも今度は嫁さんの脛にスリスリだ。もはやその物体に対する恐怖心はとうに消え去り、むしろ両飼い主の今後の戦況を恐れ、強い方に自制を促しているかのような気の使い方である。よもたん偉いぞ。子は鎧ならぬ、寝子は鎧か。

「どこからか降ってきたとでも言うの」「おかしいでしょ」

「うん。笑える」和ませることはできるか。

「何が笑えるのよ。おかしいの意味が違います」冗談も通じないお役所的返答だ。

「で、いつからあったの」ほんの僅かに軟化してくれた口調だが、油断はならない。

「さっき、帰って来た時にはあった」

「これ。何」

「プレゼントかも」しまった。軽率にも嫁さんの誕生日が近いことを忘れていた。

「嫌。こんなの嫌」とうとう泣き出した（ウソ泣き見え見え）

「ねえ。よもたん助けてくれないか」あれっ。よもたん悲しい目をして、窓から遠くを眺めている。夫婦喧嘩は猫も喰わない。